

## 人間関係育成プログラムの実践 — 特別活動への活用による成果 —

八木橋 勉

### 要 旨

中学校及び高等学校の教育課程は、学校教育法施行規則に規定されているが、その中に特別活動が含まれており、特別活動において育成することを目指す資質・能力は、教育課程全体において特別活動が果たすべき役割なども含めて「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点として整理されている。これらの育成において有効に機能するアドベンチャー教育を、城西大学教職課程センターが主催する「教員養成講座 春季合宿」において、教員採用試験の受験を目指す学生を対象として実施した。目的は、初対面の学生たちの相互理解を図り人間関係を育成し、各参加者相互の理解を深め充実した研修とするためである。実践報告では、この手法を紹介し、今回の合宿における成果を報告するとともに特別活動におけるアドベンチャー教育の効果的な活用について述べる。

キーワード：特別活動，人間関係形成，アドベンチャー教育

### 1. はじめに

今回の学習指導要領改訂に伴う高等学校学習指導要領解説 特別活動編には、特別活動の目標が次のように記述されている。

#### <特別活動の目標>

学校教育における特別活動の目標は、学習指導要領に次のように示されている。

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

(1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるように

する。

(2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。

(3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度を養う。

この特別活動の目標は、ホームルーム活動、生徒会活動及び学校行事の三つの内容の目標を総括する目標である。これは、教育課程の内外を含めた学校の教育活動全体における特別活動の役割を、より一層明確に示すものである。

また、特別活動において育成することを目指す

資質・能力は、教育課程全体において特別活動が果たすべき役割なども含めて「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点として整理されている。また、各視点について次のように解説されている。

「人間関係形成」は、集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点である。人間関係形成に必要な資質・能力は、集団の中において、課題の発見から実践、振り返りなど特別活動の学習過程全体を通して、個人と個人あるいは個人と集団という関係性の中で育まれると考えられる。年齢や性別といった属性、考え方や関心、意見の違い等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくるのが大切である。なお、「人間関係形成」と「人間関係をよりよく形成すること」は同じ視点として整理している。

「社会参画」はよりよいホームルームや学校生活づくりなど、集団や社会に参画し様々な問題を主体的に解決しようとするという視点である。社会参画のために必要な資質・能力は、集団の中において、自発的、自治的な活動を通して、個人が集団へ関与する中で育まれるものと考えられる。学校は一つの小さな社会であると同時に、様々な集団から構成される。学校内の様々な集団における活動に主体的に関わることが、地域や社会に対する参画、持続可能な社会の担い手となっていくことにもつながっていく。また、主権者としての自覚の醸成にも結びつくものである。なお、社会は、様々な集団で構成されていると捉えられることから、ホームルームや学校の集団をよりよくするために参画することと、社会をよりよくするために参画することは、「社会参画」という意味で同じ視点として整理している。

「自己実現」は、一般的には様々な意味で用いられるが、特別活動においては、集団の中で、現在及び将来の自己の生活の課題を発見し、よりよ

く改善しようとする視点である。自己実現のために必要な資質・能力は、自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力、自己の生き方を考え設計する力など、集団の中において、個々人が共通して当面する現在及び将来に関わる課題を考察する中で育まれるものと考えられる。

特別活動に関する具体的な教育活動には、ホームルーム活動・生徒会活動・学校行事があり、それぞれの目標について次のように示している。

#### ホームルーム活動

ホームルームや学校での生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、ホームルームでの話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

#### 生徒会活動

異年齢の生徒同士で協力し、学校生活の充実と向上を図るための諸問題の解決に向けて、計画を立て役割を分担し、協力して運営することに自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

#### 学校行事

全校若しくは学年又はそれらに準ずる集団で協力し、よりよい学校生活を築くための体験的な活動を通して、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養いながら、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す。

以上のとおり、学習指導要領に示された特別活動の目標に対して、アドベンチャー教育は「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」に大きな成果を期待できる。そこで、この手法の概要を示すと

ともに教職課程センター主催の2018年2月に実施された春季合宿の冒頭に参加学生のコミュニケーションを円滑に図り、人間関係形成を目的として取り組んだ実践について報告する。

## 2. アドベンチャー教育の概要

「アドベンチャー教育」は株式会社プロジェクトアドベンチャー・ジャパンにより展開されているアドベンチャーの要素を活用した体験活動である。この活動を体験学習として教育の世界に取り入れることにより得られる効果が次のように紹介されている。

- ・「子どもたち自身の気づきから生まれる学び」
- ・「子どもたち同士の関わり合いから生まれる学び」
- ・「みんなにとって居心地がよく、一人ひとりの違いが受け入れられているクラス」
- ・「子どもたちの力で、目標とする自分たちの姿に向かっていけるクラス」
- ・「グループ体験を通して、自分自身を知る、他者を知る」
- ・「ふりかえりを通して、自分自身の価値観を見つめる」
- ・「ファシリテーションを通して、子どもたちの関わり方を考える」

(株式会社プロジェクトアドベンチャー・ジャパン  
HP <http://www.pajapan.com/>)

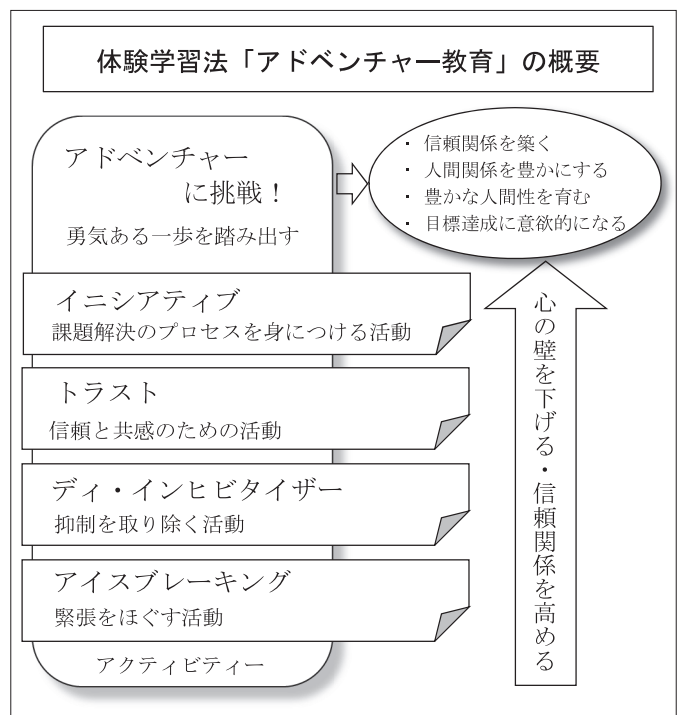
「アドベンチャー教育」に関しては、NPOの研究団体では次のように解説されている。

「アドベンチャー」という言葉からは、肉体的にも精神的にもハードなことを行うというイメージがあるが、ここでいう「アドベンチャー」とは、心理的なリスクを伴う行動に対する個人内の葛藤を乗り越え、新しい自分を発見することである。この「アドベンチャー」を私たちの生活の中

でとらえてみると、実はごく身近にあることに気づくことができる。たとえば、会議等において手を挙げて発言することも、友人に自分の考えを伝えることも、普段は避けていた事柄に取り組むなど、その行動に心理的な負荷を感じる場合は、「アドベンチャー」と言える。つまり、山や川などの危険な場所に行かなくとも、日常生活の中で私たちは「アドベンチャー」に挑戦することができる。

「アドベンチャー」には、自己との対峙、葛藤、自分自身に対する挑戦、仲間との協力、成功体験、達成感など人間の成長には欠かすことのできない要素がたくさん含まれており、「アドベンチャー教育」には、今、教育が必要としている「答え」があると言っても過言ではない。

(『「心をひらくアドベンチャー教育」実践のための第一歩』NPO埼玉県アドベンチャー教育研究会)



### 3. 教職課程センター主催春季合宿における アドベンチャー教育の実践

#### 3.1 目的

春季合宿に参加するメンバーは、ほとんどの学生が初顔合わせの状況である。人間関係が希薄な状態のまま研修に入るより、お互いが理解を深めたいという課題に取り組むことが、相互の意見交換や会話を含め合宿生活を居心地のよい環境とすることができる。出会いから短時間に相互理解を基盤とした人間関係を構築するためには、アドベンチャー教育を合宿の最も早い時期に展開することが最も効果的であると考えた。

#### 3.2 アドベンチャー教育の実践内容

##### 3.2.1 ネームトス (アイスブレイキング)

学部学科はもちろんのことキャンパスも異なる男女の学生が20人を超えて集まる中で、不安感や緊張感が合宿の会場に漂う中であって、相互の挨拶と氏名の確認を行うアクティビティー「ネームトス」を実施した。グループごとにメンバーが円を描いて並び内側を向く、比較的大きなゴムボールをグループでお互いに両手で軽くトスを行う。投げる際に挨拶、自分の名前、投げる先の相手の名前を大きな声で伝える。相手を不規則に変化させることでグループ全員の名前と人物を一致させることができるようになる。



ネームトス  
「こんにちは！Aです。Bさん。よろしく  
お願いします。合宿、頑張りましょう！」

##### 3.2.2 ボールパス

「全員にボールをパスする。一人が一回ボールに触れること」を約束として、最も短い時間で行う方法を全員で案出する。時間計測を行い、2グループ間でその結果を競う。



ボールパス  
「こうやれば、最短時間で、大成功間違えなし！」「みなさん、準備はいいですか？」

##### 3.2.3 ヒューマンインパルス

全員で輪になり、手をつなぐ。一人が発信者となり隣の人の手を軽く握る。握られた感触を得たら速やかに異なる側の隣の人の手を軽く握る。これを繰り返し最初の発信者の人まで一回りする時間を計測する。2回目以降、その前回の計測時間より短い時間を設定し、チャレンジする。全員で相談し、達成不可能と思われる時間を目標として心を合わせて挑戦する。



ヒューマンインパルス  
全員で気持ちを合わせて時間短縮に挑戦だ！

### 3.2.4 浮かぶ新聞紙

新聞紙を15cmの幅に切断したものを円筒状に巻き付けテープで張り付けたものを、グループ全員で人差し指で支えながら、床にまで下げていくというアクティビティーを実施した。グループの全員が人差し指を伸ばした状態で円筒状の新聞紙を下から支えるように指の第1関節の付近で必ず新聞紙の底部に触れる。全員の指が触れた状態で床まで下げていく工夫をする。



浮かぶ新聞紙

「不思議？なぜ？この新聞紙は、浮いているの？」「どうやったら、下がるの？」

### 3.2.5 ヒューマンチェアサークル

合宿参加者全員が円を描いて一方向を向いて並ぶ。円の中心に向かって移動し、半径を小さくしつつ正確な円を形作る。両手を前に位置する友人の肩にかけ、後ろの人の膝の上にゆっくりと腰を下ろす。安定したところで左手を上を右手を肩の高さで横に水平に伸ばす。この状態のまま全員で10秒カウントする。



ヒューマンチェアサークル

「1, 2, 3・・・ 全員が一つになった！」

### 3.3 結果

初顔合わせの集団であったが、お互いの名前を知ることから始まり、アクティビティーを進めるにつれて、一つの共通の課題を解決するための意見交換や相互理解により円滑な人間関係を構築する姿が見られる。解決までの経過を振り返ることにより集団としての信頼関係や未知の課題や目標に向けた取り組みに対しても、仲間の協力や支援や言葉かけが目標への到達に必要であり有効であることを体験として学びながら確実に身につけている様子が見えてくる。今回の合宿の目的である教員採用試験への対策である一般教養・教職教養の学びや個人面接・集団討論の実践についても、お互いの意思の疎通を通じた目標達成への有効な共助集団が形成されたものと推測する。

## 4. 参加者のアンケート回答の記述内容

### 4.1 記述による回答

- ・最初のアイスブレイキングで色々な人と打ち解けることが出来た。
- ・アイスブレイキングのほかに触れ合える時間が欲しかった。
- ・他の人との関わりは大事だと改めて学んだ。
- ・自分が進む道をはっきりともつことができた。
- ・自分の得意教科を教え、不得意の教科を教してもらい、励まし合いながら勉強しています。
- ・仲間の大切さ（全体を通して改めて学んだ）

### 4.2 今回の合宿で新しい交友関係を築くことができたか。

今まで接点のなかった友人ができた	11
交友関係が広がった	3
あまり広がらなかった	0
特に変わらない	0
未回答	0

### 4.3 アンケートの記述内容からの考察

今回のアンケート調査に関しては、参加者25名に対し、得られた回答は14人ということもあり、全員の意見とは言えない。しかし、集団における人間関係形成にアドベンチャー教育が効果を示したことについては否定できない。特にアイスブレイキングにより初顔合わせの関係からある程度の会話のできる関係性を醸成したことは確かである。また、構築された友人関係の中で、相互の支援や助言が円滑になされている様子が伺える。学び合いの姿勢や励まし合う姿がこのアンケート結果から確認できる。

## 5. アドベンチャー教育による集団形成

人間関係を形成するうえで、段階的に相互の心の壁を低くする。また、課題解決に向けた自らの意見を伝え、仲間の意見を受け止めながら相互理解を深めていく。最終的に協働の中で課題を解決することで達成感や充実感を共有し、集団が成長する。アドベンチャー教育は、これらの一連の変化を集団の構成員の全員が自然な形で受け入れることができるような手法である。その特徴について以下に述べる。

### 5.1 身体接触の段階的な進行

アクティビティーは、ボールの受け渡しというお互いに距離を保ちながら進める形式から始まる。声を掛け合うことで緊張感を取り除き、相互に自己紹介をすることで相互理解を深めていく。次の段階では、ボールを全員が触れるという条件および短時間に行うという条件からお互いに密接に近づくことが要求されることになり、身体が触れ合うことを自然に受け入れる。次の段階でも円筒形の新聞紙に人差し指を添え、体を上下することで同様に身体が接触し全員の視線が同一の高さに固定され、顔を寄せ合い近づく姿勢となる。さ

らに手をつなぎ合いお互いの握りしめる感覚の中にありながらも時間短縮を追求する目標達成に向け違和感のない協力性が生じる。最終段階では、全員がお互いに隣り合った仲間の肩に手をかけ、膝の上に腰かけるといった身体接触まで発展させることができる。

### 5.2 課題解決に向けた意見交換から相互理解へ

アクティビティーは、課題に対して解決に向けた構成員全員の意見交換や共通行動により取組が進められる。その場面では、課題の解決という一つの目標に対するそれぞれの意見が交わされる。目的の達成に向けてという点において、お互いの意見を尊重しつつ、自分自身の意見を全員にわかりやすい表現で伝えるという意識が生じる。最終的に課題が解決されたとき、その集団のチーム力は大きく成長する。その成長の度合いは、取組を行った各アクティビティーの終了時に振り返りを実施することによりさらに大きく強固なものとなる。

### 5.3 理想的な集団への成長

集団に対する思いは構成する各メンバーによって異なることから、アドベンチャー教育ではそれぞれのメンバーが集団の在り様について希望・要望を文字によって示す方法を紹介している。名称は「ビーイング」と呼ばれている。具体的には、模造紙等に人や樹木の形などグループにとって象徴的な形の輪郭を描き、その輪郭の内側に自分たちが安心できるグループにするために、自分自身ができること、仲間にしてほしいこと、理想とする集団像などを記入し、輪郭の外側には自分がされたいやだと思うことなど、あって欲しくない言動について記述する。お互いの言葉の意味を確認し合い、納得ができたならその言葉を実行する約束のサインをする。各メンバーの心の安全を確保するため常に活動の場に持参・掲示し、記述内容

を全員が意識しながら課題に取り組む。

#### 5.4 個々の成長を支援する集団の力

一人では挑戦できないことでも、集団として周囲からの応援や支援があった場合は、それを成し遂げようとする勇気が湧いてくる。目標をより高く設定し、その目標達成に対して意欲的になる。豊かな人間関係に基づいたお互いの学び合いや声掛けによる個人の成長は計り知れないものがある。アドベンチャー教育には、このような集団の成長から個々の成長へと発展する可能性が存在する。

#### 5.5 集団の観察から得られる認識

アドベンチャー教育の実施にあたりアクティビティーの内容説明や安全配慮事項等について説明する立場の者をファシリテーターという。ファシリテーションとは、大辞林によれば、グループによる活動が円滑に行われるように支援すること。特に、組織が目標を達成するために、問題解決・合意形成・学習などを支援し促進することとある。ファシリテーターは、その担当者ということになるが、課題解決に対して自分の意見や解決に向けた助言は行わない。課題の内容と解決に向けた条件を伝えた後は、集団の動きを観察しつつ事故の起こることのないようにサポートを行うことが重要な務めである。一方、この集団形成の全体の取組状況からファシリテーターは、構成員の個々の人間性を認識することができる。課題解決に向けた発言や仲間に対する言葉掛けや行動などから、その個人が持つ積極性・寛容性・協調性・リーダー性などが察知できるとともに、集団への関与が不得手であるなど人間関係形成に配慮を必要とすることなどが認識できる。このように理想的な集団形成を行うと同時にメンバー個人を知ることがアドベンチャー教育は可能にする。

## 6. 特別活動とアドベンチャー教育

学習指導要領にもあるように、特別活動において育成することを目指す資質・能力は、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点として整理されている。これらの育成は、ホームルームを活動の場面とすれば、教師がファシリテーターとなり、生徒に対してアドベンチャー教育を実施することにより、自然の流れの中で円滑な人間関係を形成することができる。また、個人としては自己存在感や自己有用感のもとに集団の一員として課題解決に向けた意見を示し、協働の中で目標を達成する経験が得られるであろう。このことは、社会参画に通じることでもあり、周囲の支援を受けながら高い目標の自己実現を可能にする。円滑な人間関係の形成がなされることにより、現在の教育の世界で問題となっているいじめや不登校、暴力行為の減少、解消にも大きく貢献することであろう。このような考えに立った時、特別活動におけるアドベンチャー教育の取組は、意義のあるものと結論づけることができる。

#### 〔参考資料〕

- ・学習指導要領（平成30年度告示）解説「特別活動編」（平成30年7月発行 文部科学省）
- ・株式会社 プロジェクトアドベンチャージャパンHP  
<http://www.pajapan.com/>
- ・『心をひらくアドベンチャー教育』実践のための第一歩』（NPO埼玉県アドベンチャー教育研究会）